

7 後牟田遺跡AT下位石器群と九州における後期旧石器時代前半期の変遷

橋 昌 信

(別府大学文学部)

はじめに

九州においては1990年の前後から、後期旧石器時代の初期段階に位置づけられる熊本県曲野遺跡とほぼ同時期、あるいはそれを遡る年代が考えられる遺跡の発掘調査が相次いで行われるようになる。それに呼応して中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期や後期旧石器時代の成立期が問題視され、その一方で、表面採集資料ないしそれに準ずる資料から、中期旧石器時代後半期の可能性のある石器群が俎上にあがるようになった(九州旧石器文化研究2000)。このような状況に鑑み、当該期の現状把握と幾つかの予察を試みる機会があった(橋1999c、2000)。すなわち、九州における後期旧石器時代の前半期の変遷は、AT直下の黒色帯とその直下に続く褐色ローム層中出土の石器群が深く関わりと考えられるだけに、その両者の地層に基づく主要な遺跡出土の石器群の諸様相から、成立期と発展期とに大別し、また、中期旧石器時代後半期および移行期の可能性が考えられる石器群も含めて位置づけを行った。後牟田遺跡の主要な石器群である第Ⅲ文化層と第Ⅱ文化層は、九州地方の後期旧石器時代の発展期・成立期さらに移行期に関連することから再度、後期旧石器時代前半期の石器群に触れるが、できるだけ重複をさけ九州南部の地域を主体にまとめてみたい。

1 石器群の出土層位とテフラ

九州の後期旧石器時代の時間軸を考える際の基本になる火山噴出物で最も代表的なものに、始良カルデラ起源の火砕流(シラス)・軽石・AT火山灰がある。この噴火・堆積の年代については、異なる測定方法や補正(校正)年代などで幾つか出されているようであり、25,000~27,000年前が考えられるのであろう。また九州の大半の地域では、このAT層直下に腐植化の進んだ黒色~黒褐色土層がほぼ一様に堆積しており、この黒色帯(ブラックバンド)はAT火山灰とのセットで、層位的な鍵層として援用されている。黒色帯についてはその生成や成因などのメカニズム、また理化学的方法による明確な年代を知り得ないが、AT火山灰および黒色帯直下の火山灰層などのC14年代を考慮すると、28,000~29,000年前が予測されよう。これらの広い地域に認められる土層の外に、種子島では約3万年前の種4火山灰(種Ⅳ)が、これよりやや古い年代が考えられる霧島イワオコシ軽石層(Kr-Iw)が南九州東部地域で存在する。さらに東九州地域では40,000年前の前後が推定される九重第1軽石層(Kjp-1)が認められる。

九州地方で後期旧石器時代前半期、あるいは中期旧石器時代から後期への移行期の石器群を検討する際、地層的には先に挙げたAT火山灰下位の黒色帯上部、黒色帯下部から漸移層、さらに直下の黄褐色あるいは赤褐色火山灰土層（粘質土層）の上部～中部が問題とされる。年代的にも種Ⅳ火山灰・霧島イワオコシも当然重要視される。分布範囲は限られているが中九州地域のほぼ中央部では九重第1軽石層も関連することになる。そこで後牟田遺跡第Ⅱ文化層・第Ⅲ文化層の出土層序および石器群との対比が可能と考えられる主要な遺跡を地域ごとに概観し、移行期・成立期・発展期という、歴史的な変遷の枠組みを提示し、九州における後牟田遺跡AT火山灰下位出土石器群の位置づけを試みることにする（註）。

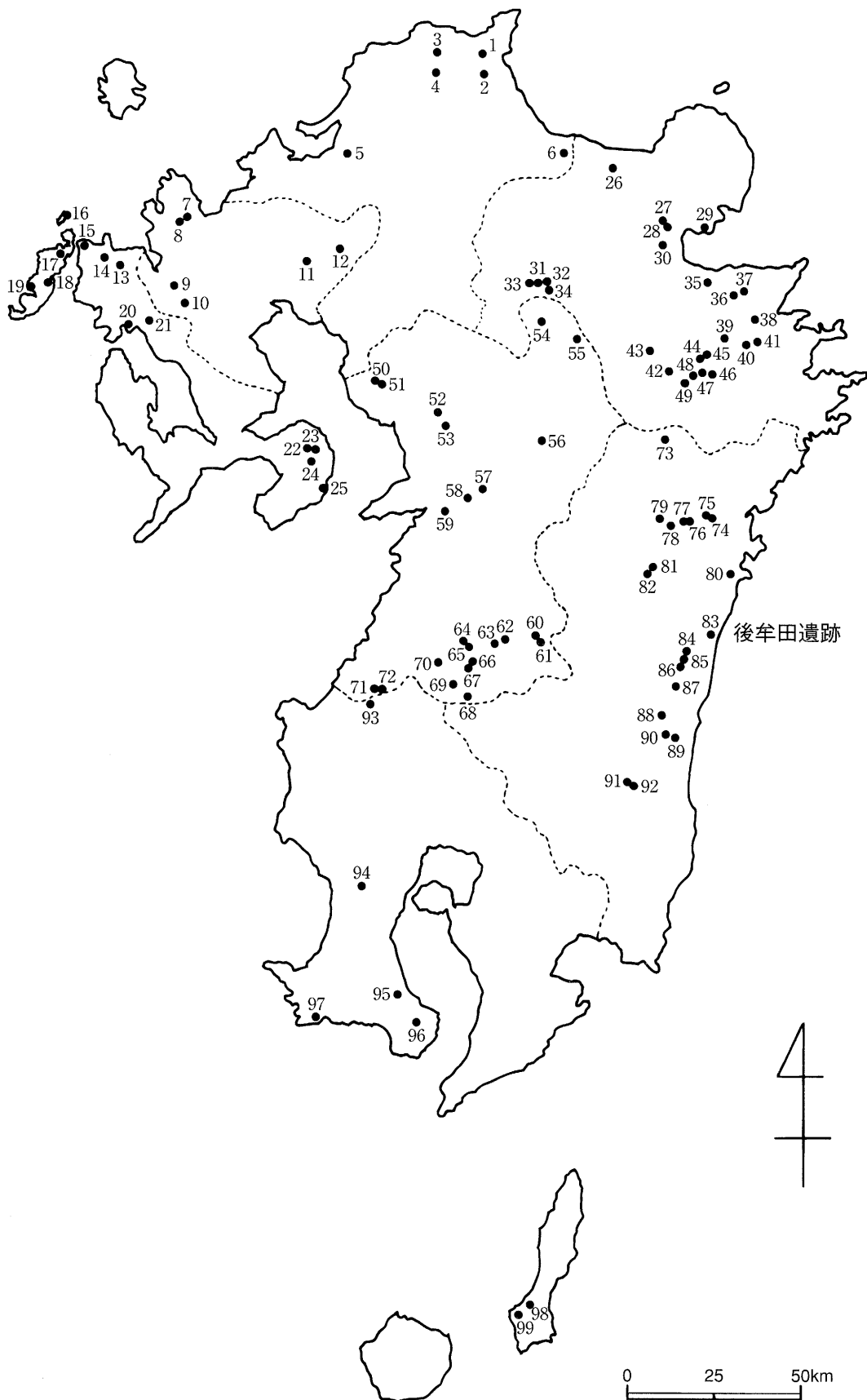
2 発展期～移行期の遺跡と石器群

2-1 南九州西部地域

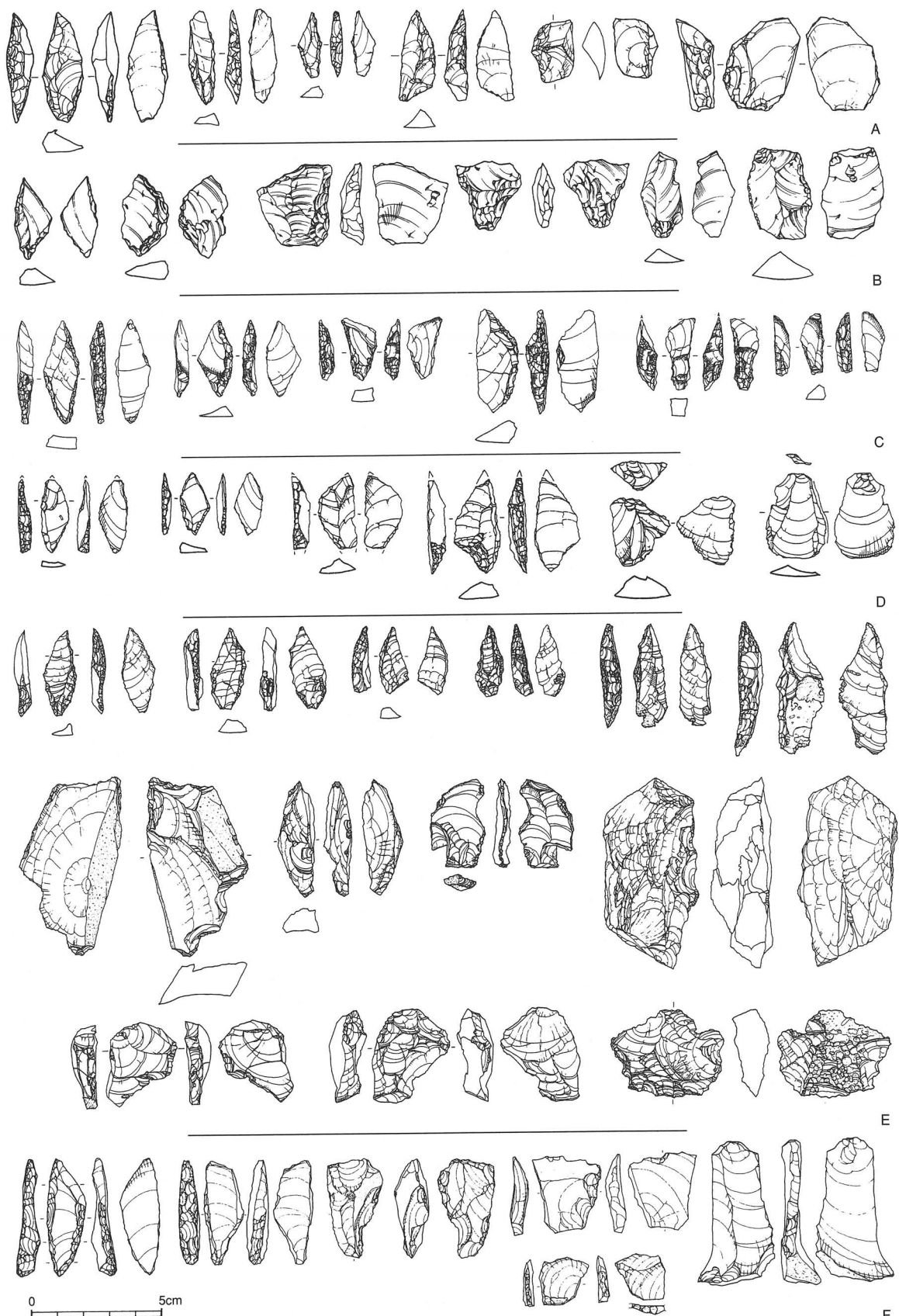
南九州西部の鹿児島県では上場遺跡の調査以降、後期旧石器時代前半期の発掘調査例が久しくなかったが、待望のAT下位のまとまった石器群が帖地・前山の両遺跡で発見された。九州地方におけるAT下位出土遺跡の分布図（第227図）でも明らかのように、熊本県南部の球磨・人吉地域を除けば当該期の遺跡は数えるほど少ないのである。これはこの地域の大半が始良カルデラ起源のシラスなどの厚い火山噴出物で覆われていることに他ならない。それだけに近年発掘調査された両遺跡は、南九州西部地域における後期旧石器時代前半期石器群の様相を明らかにする手掛かりになると共に、九州における当該期の他遺跡との比較検討を可能にした。また、種子島の横峯C遺跡と立切遺跡で種Ⅳ火山灰との層位的な関連で発見された石器群や遺構は、後期旧石器時代前半期における植物質食糧重視の生活体系に注目させた（堂込1998）。

帖地遺跡では始良カルデラ起源の堆積層下位で、数センチの黒色粘質土層（17層）・淡褐色粘質土層（18層）から、礫群や配石を伴って300点余の帖地第4文化層の石器群が出土している（永野2000）。石器群の主体はナイフ形石器で、縦長剥片を素材にした二側縁・一側縁加工のナイフ形石器、幅広剥片素材の切出し形、さらに2センチ前後の小形のナイフ形石器などが出土している。一方、台形様石器は幅広剥片を素材に、打面あるいは折断によると考えられる平坦面から平坦剥離や急斜度の調整加工を施したものが存在する（第228図A）。他に、厚みにある縦長剥片を素材にした搔器・削器なども出土している。縦長剥片・やや寸詰まりの縦長剥片を両設打面や単一打面から剥離した石核や、打面転移を頻繁に行ないながら全面から幅広剥片を剥離している多面体石核、さらに剥片素材の石核などが出土している。

前山遺跡でもAT風成再堆積層下位の暗紫色粘質土（7層）から約500点の石器群が出土している（桑波田・宮田1997）。定型的な石器は10点ほどであるが、その大半は台形様石器で占められており、幅広剥片を折取った面に急斜度の調整、そのまま残すもの、あるいは剥片の平坦打面を一側辺として利用するものなど、急斜度調整・平坦剥離が認められる。切出し形のナイフ形石器にも一側縁は折断



第227図 九州におけるAT下位石器群の出土遺跡分布図



第228図 後期旧石器時代発展期の石器群

A. 帖地遺跡第4文化層

B. 上場遺跡6層上部

D. 久保遺跡第1石器文化

E. クノ原遺跡

C. 狸谷遺跡Ⅰ石器文化

F. 耳切遺跡第Ⅱ石器文化

後に急斜度の刃潰し加工を行なったと考えられるものが見られる。石核には幅広剥片を剥離しているチョッピングツール状のものや厚手の剥片を素材に用いて同様の剥片を剥離したものなどが存在する。

南九州西部地域の薩摩半島に所在するこの2遺跡は定型的な石器数に多寡があるものの、ナイフ形石器と台形様石器が共通して組成される。ナイフ形石器には縦長剥片を素材に急角度の刃潰し加工による二側縁および一側縁のもの、幅広剥片を大きく変形させた小型の切出し状のものが存在しており、これらの調整加工で折断技法が適時用いられたものと推測される。台形様石器には両面あるいは両側縁・一側縁に平坦剥離もしくは急斜度の調整を施して台形状に整えたものなどが認められる。これらの石器群に共通する要素として、素材に幅広剥片を用いて、打面や折断による平坦面を活用した平坦剥離や急斜度の調整加工が多用されていることを指摘できる。また、剥片剥離技術を示す石核は打面を転移させ、あるいは打面と剥片剥離作業面を入れ替えながら幅広剥片を剥離していることなどでは共通しているが、帖地遺跡では特に縦長剥片剥離技術が発達している。このように素材剥片や石器の形態・製作技術などに、発展期の他遺跡と共通性が認められ、九州全域での等質的な発達の様相が窺える(橋1999b)。

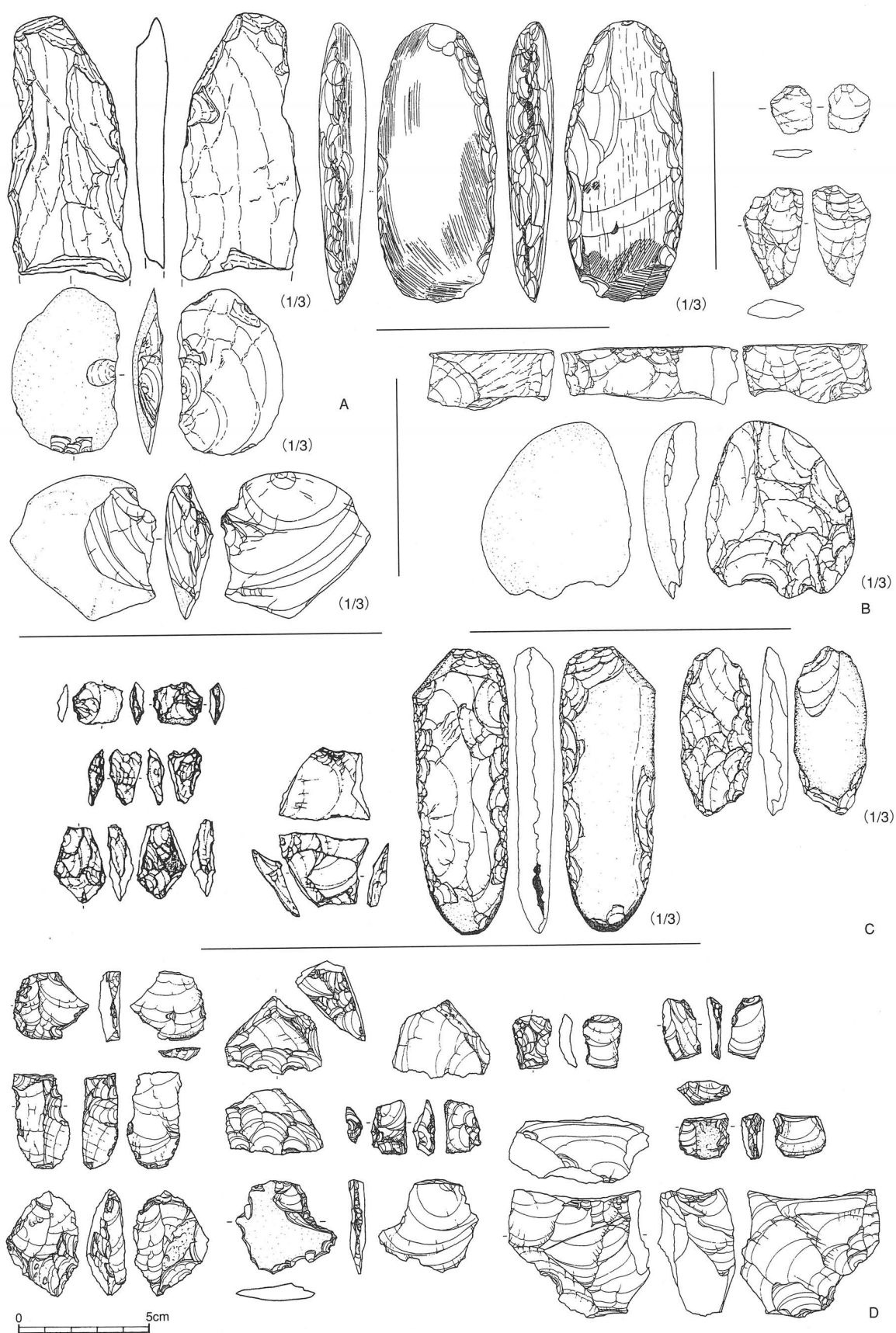
一方、種子島の横峯C遺跡(坂口・堂込2000)および立切遺跡(堂込2000)では約3万年前の種4火山灰の層位に関連する石器群が発見されており、九州地方の当該期の究明で重視される。

横峯C遺跡はAT層と種Ⅳの中間の土層から礫群と台石・敲石・磨石それに礫器、剥片などが認められる(Ⅱ文化層)。さらに種Ⅳ直下の淡褐色粘質土層からも礫群とハンマーストン(敲石)が発見されている(Ⅰ文化層)。種Ⅳを挟んだⅠ文化層とⅡ文化層については、台石や礫群の出土状況およびC14の測定値から、約3万年前の前後の極めて接近した時期と判断できる。これらの文化層から礫群・炭化物などが出土しており、それらを中心にかなり広範囲の面積を発掘しているが、両文化層からの石器群の出土数は限られ、しかも大半は礫塊石器で占められているのである(第229図B)。

立切遺跡でも種Ⅳ火山灰に覆われた直下の土層から、磨石石斧・打製石斧3点、礫器3点、磨石・砥石・石皿などの礫塊石器39点、それにスクレイパー1点、二次加工剥片3点などが出土しており(第229図A)、さらに土壌・礫群・ファイヤーピット(焚き火跡)など、まとまった貴重な生活遺構が発見されている。

当遺跡の種Ⅳ下位文化層から発見された石器の数は上記のように必ずしも多くなく、特に剥片石器は少ない。打製石斧の石材や形態的・技術的特徴から、主要な使用目的は地中の根茎類などの植物質食糧を獲得するための土掘り具が推測されよう。礫塊石器は80%近くを占めており、対照的に剥片石器は極端に少ないという特徴が、当遺跡においても認められるのである。検出されている土壌も食糧の貯蔵穴としての可能性があり、礫塊石器と共に植物質食糧の依存度の高さを窺うことができる。

南の種子島とは対照的に、南九州西部の熊本県側に所在する上場遺跡(池水1967)は、第5層のパミス混じりローム層がAT層に相当し、その下位の6層には時期を異にする2つの文化層が存在して



第229図 後期旧石器時代成立期の石器群 A. 立切遺跡 B. 横峯C遺跡 I・II石器文化
C. 血気ヶ峯第2石器文化 D. 潮山遺跡

いる。上部からナイフ形石器・台形様石器・搔器・削器・折断剥片などが、さらに下部からは礫器（片刃・両刃石器）・礫核石器（握槌状石器）など大型の石器群の出土が知られている。

6層上部のナイフ形石器には小形の二側縁・一側縁加工などが存在しており、台形様石器は平坦剥離・急斜度の調整を行なったもの、折断加工によるものなどが認められる（第228図B）。これらの石器にはややすづまりの縦長剥片、幅広剥片が素材に用いられ、石核は打面を転移させながら剥片剥離を行なっているものが出土している。

一方、上場遺跡6層下部の石器群にも幅広剥片やすづまり気味の縦長剥片、それに折断剥片などは出土しているが、上部で見られたナイフ形石器や台形様石器などの定型的な剥片石器は認められないようである。それに6層上部およびそれより上位の文化層出土の石器石材は、黒曜石を主体にしているのに対して、下部の石器群では頁岩・チャート・硬砂岩などが用いられ、石材利用に違いが見られる。これら6層下部石器群の様相は、当地域での成立期と推測され、さらに移行期に溯る可能性もあるが、資料が限られているため明確な判断は下せない。

行政区分では熊本県に入る南九州西部の球磨・人吉地域では、狸谷Ⅰ石器文化（木崎1987）、血気ヶ峯第1・第2石器文化（和田2001）、久保第1石器文化（木崎1993）、クノ原遺跡・潮山遺跡（古森2000）など、AT火山灰下位に文化層が認められる遺跡が集中している。

狸谷遺跡は人吉・球磨地域の代表的な遺跡として知られ、下層のⅠ石器文化は入戸火砕流（シラス）直下の暗褐色粘質土層が包含層で、ナイフ形石器、搔器・削器、抉入石器、彫器、揉錐、礫器、たたき石・磨石・石皿・台石などを組成している（第228図C）。主体をなすナイフ形石器は二側縁加工や部分加工が顕著で、それに切出し状のものが加わる。剥片石器の素材には縦長剥片、やや幅が広く厚みのあるすづまりの縦長剥片、幅広剥片が用いられている。それと礫塊石器群が多いことも当文化の特徴とされる。

久保遺跡第1石器文化は狸谷Ⅰとはほぼ同様な石器群が存在する。入戸火砕流（シラス）下位の暗褐色粘質土（Ⅵ層）からナイフ形石器を主体に、搔器・削器などの石器群が出土している（第228図D）。ナイフ形石器はやや幅広の縦長剥片を素材に二側縁・一側縁加工を施した切出し形に近いものが目立つ。狸谷Ⅰとは礫塊石器が少ないことや主要石材などで若干異なっているが、共に発展期の石器群とされる。

クノ原遺跡は当地域で最も宮崎県よりに位置しており、シラス下位のⅩ層からナイフ形石器、搔器・削器、二次加工や使用痕のある剥片などが出土している。ナイフ形石器には縦長剥片を素材にした二側縁・一側縁加工のものが見られる。その一方で搔器・削器は全体的に厚みのある大型の剥片を利用したものが目立ち、刃部の調整は精粗が認められ、粗い加工には鋸歯状を呈するものや、大型剥片の一端に尖頭状の刃部を形成した錐状の石器も認められる（第228図E）。石材は黒曜石を主体に珪質頁岩・チャートなどが用いられる。層位的には狸谷Ⅰ・久保Ⅰとはほぼ同時期の石器群と考えられ、縦長剥片剥離技術による素材に急斜度調整を施したナイフ形石器などは基本的に同様と見なされ、それで

いて片方では鋸歯状の搔器・削器、大型の錐状石器などが存在するのである。

潮山遺跡はシラス下位から礫層上面にかけて石器群が出土している。隣接するクノ原遺跡では包含層の下に間層を挟んで礫層が堆積しているので、層位的には潮山遺跡が先行するものと判断される。実際、当遺跡ではナイフ形石器が出土してなく、搔器・削器、錐状石器、それに二次加工や使用痕のある剥片などが組成している。台形様石器については、その可能性を示唆するものが見られる。剥片石器で特徴的なものに、大型の剥片を素材に用いて全般的に粗い加工を施した搔器・削器が存在し、厚みのある鋸歯状のもの、外湾あるいは逆に内湾する刃部を形成するもの、細かな調整が直線的に施されているものなどバリエーションに富み数量も多い。また、一端に尖頭状の刃部を形成した大型の錐状石器もみられる。このような大型の剥片石器と共伴して、明確な器種分類は困難だが、不定形な小型の剥片に部分的な調整を行った石器が認められる（第229図D）。

当遺跡の剥片は大小含めて不定形なものや幅広のものが顕著である。しかしながら縦長剥片剥離への指向性が強く、やや幅広の縦長剥片剥離技術の存在が窺える。これは、打面転移を適時行い、しかも打点を左右に移動させながらより縦に長い剥片を連続的に剥離する技術と見なされる。しかし、打面が固定され剥離作業面を後退させながら連続的に剥離作業を進行する縦長剥片剥離技術とは様相が異なっているようである。

潮山遺跡の包含層は礫層上面に接しているため下位の土層が不明で、層位的な位置づけに明確さを欠くが、出土層位も石器群の様相も狸谷Ⅰ・久保Ⅰと大きく異なり、またクノ原遺跡とは礫層との層位的な所見から先行すると判断される。大型の剥片石器では類似した様相も見られるが、小型の剥片石器と剥片剥離技術では共通性が認められないのである。その位置づけは難しいが、南九州西部における後期旧石器時代成立期の石器群と考えておきたい。

血気ヶ峯遺跡のシラス下位で層位的に2つの文化層が検出されている。シラス層下位の白色粘土（5層）を1枚挟んだ黒褐色粘質土（6層）に血気ヶ峯第2石器文化が、さらにその下の黄橙色粘質土（7層）に血気ヶ峯第1石器文化が認められる。前者は台形様石器を主体に打製石斧・刃部磨製石斧を伴う石器文化、後者は平面三角形の尖頭器と想定されているものと、台形様石器、使用痕剥片、石核、礫器を主体にする石器文化としてとらえられている（和田2001）。

第2石器文化の台形様石器は幅広剥片を素材に用い、調整は平坦剥離、急斜度調整が認められ、さらに折断加工も併用されているようである。ただ、調整部位は側縁のみでなく刃部が推定される箇所にも観察される点は注目しておきたい。使用痕剥片の1点は使用痕の部位および全体の形態から折断加工による台形様石器の可能性が高い。石斧は2点共に扁平なやや細長い礫を利用し、一面の大部分に自然面を残している。石材にはチャート・黒曜石・安山岩・緑色片岩などが使用されている（第229図C）。

第1石器文化の尖頭器とされているものは、基部に素材の自然面が見られることからピックとされよう。台形様石器は欠損しているため器種の認定に明確さを欠くが、台形様石器として判断できそう

である。石核は礫の分割面を作業面して周辺から幅広の剥片を剥離している。礫器はやや大形の扁平な礫を素材に周辺から剥離を施しており、チョッピングツール、あるいは石核の可能性も考えられよう（第230図C）。

正式な報告書が出されていないため、全容を知ることができないが、血気ヶ峯遺跡第二石器文化にはAT直下の黒色帯上部に認められる定型的なナイフ形石器に対応する縦長剥片あるいは寸詰まりの縦長剥片を連続的に剥離する技術は認められない。当文化は距離的に近く、また石材利用でも共通する部分がある狸谷Ⅰ石器文化の石器群の様相とは著しく異なっている。この両者の違いは時間的な先後関係に起因するもので、層位的にも狸谷Ⅰがシラス直下の黒色帯上部であるのに対して、血気ヶ峯二は黒褐色粘質土層とその下位の漸位層に包含層が見られることから明らかである。それにシラス層と黒褐色粘質土層の中間に位置する白色粘土層（5層）の存在も時間差の上で示唆的である。南九州西部地域の黒色帯下部から漸位層における石器群の様相として、成立期に位置づけられる。第一石器文化も公表されている資料が限られ、しかも一部が欠損していることもあり特徴的な石器群が定かでない。しかしながら層位的に黒色帯よりさらに下位の黄橙色粘質土層に文化層が認められ、それに第二石器文化との対比から黄橙色粘質土層上部～中部が主要包含層と考えることができよう。黒色帯下位の黄橙色～褐色土層に文化層が存在する石の本遺跡第8区と層的に近いものと考えられ、またピックや台形様石器も、両文化層の類似性として指摘できる。これらの事から当地域での移行期の石器群として位置づけられよう。

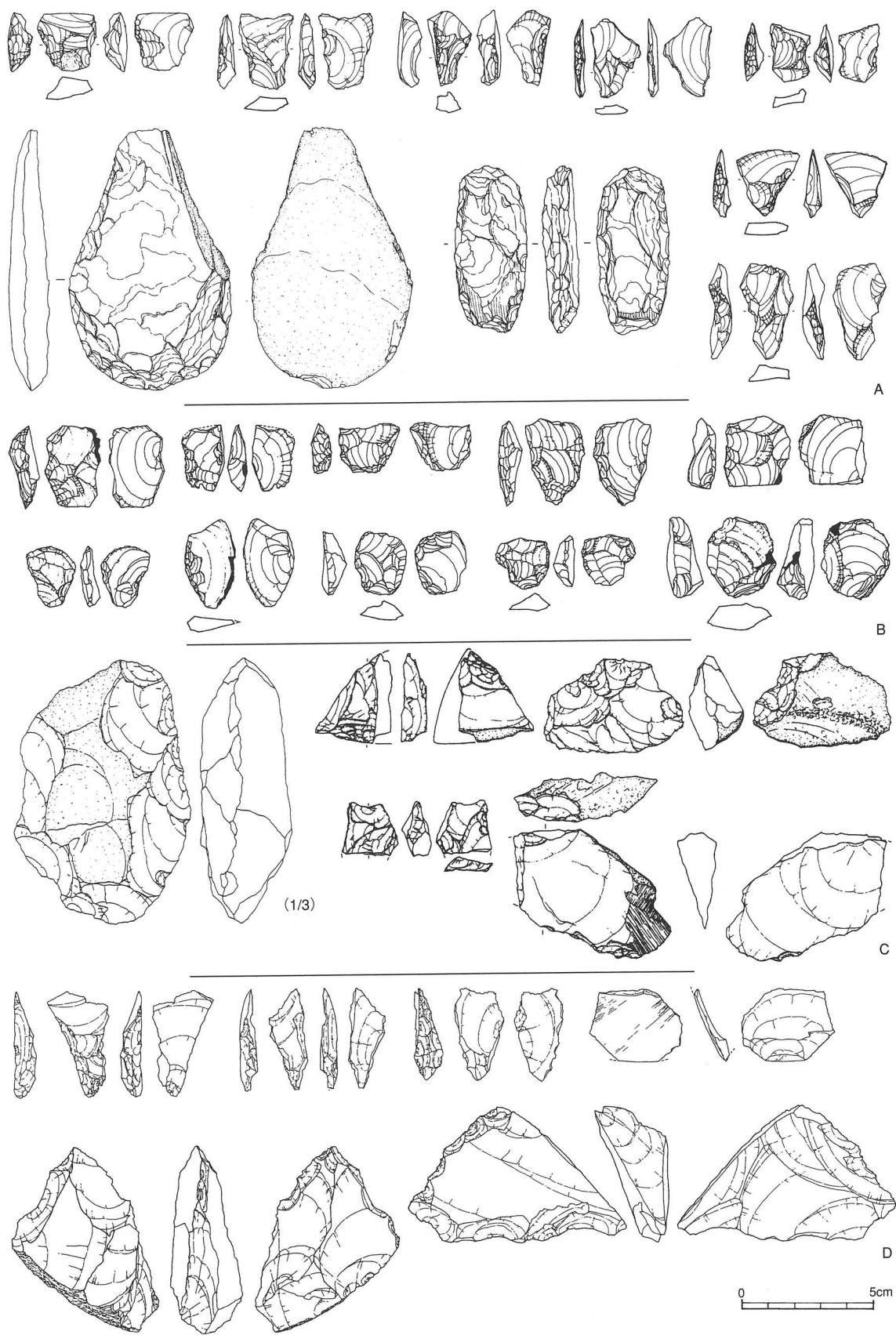
2-2 南九州東部地域

後牟田遺跡が所在する南九州東部の宮崎県で、AT火山灰より下位の地層から石器群が発見されている遺跡は20箇所を超えているが、現時点でその実態が解るものは少ない。

矢野原遺跡（谷口1999）は宮崎県北部に所在し、後牟田遺跡と距離的に比較的近い遺跡と言えよう。当遺跡では第7層がAT火山灰で、その下位に暗褐色硬質土層（8層）が30～70cm堆積しており8a・8b・8c層に区分され、石器群は8c層下面から下位の褐色粘質土層（9層）上面にかけて出土している。

概報によると石核・剥片類・磨石などの石器群が出土しており、石材は水晶が最も多く、次にチャートで、他に流紋岩と砂岩が利用されている。水晶の剥片類は大きさが2～3cmのものが多く、スクレイパーや二次加工のものが数点見られる程度とのことである。

当遺跡のツールにナイフ形石器や台形様石器の可能性のある石器が少数存在するようであるが、形態的・技術的に定型化の度合いは極めて低い。むしろ、小型剥片の側縁や基部に部分的な調整が施された石器が顕著である。水晶という石材が関係しているのであろうが、チャート製の剥片にも同様な傾向が認められる。一方、流紋岩製の石器には石核を利用したと考えられる大型の鋸歯縁石器が存在している。剥片は不定形、幅広、それに縦長剥片を意図したやや幅広の縦長のものなどが出土してい



第230図 後期旧石器時代成立期・移行期の石器群 A. 曲野遺跡 B. 耳切遺跡 A地点第I石器文化 C. 血気ヶ峯第1石器文化 D. 石の本遺跡8区

る。また、石斧と考えられるものも見られる。報告書の刊行を待って検討すべきであろうが、出土層位および石器群の概要、それに他遺跡との対比から、成立期としての位置づけが予想される。

近年調査が行われた宮崎県のほぼ中央に位置する高野原遺跡（廣田2000）では、Ⅷ層にAT火山灰が堆積しており、剥片・礫などの石器類は黒褐色土層（Ⅸ層）からの褐色土層（Ⅹ層）にかけて出土している。ちなみに、ⅩⅡ層が栗オコシの漸位層である。定型的な石器は少ないようであるが、スクレイパーと折断調整による台形様石器と考えられるものが見られる。打面を転移しながら寸詰まりの縦長剥片を剥離する技術の存在が窺える。石器群は黒褐色土層から褐色土層上部の途切れることなく出土しているようで、文化層と層位との明確な対応関係を知ることができないが、石器群の様相からは成立期の可能性が考えられよう。

2-3 中九州西部地域

熊本県のほぼ中央部でAT火山灰下位に石器群が包含されている主要な遺跡として、曲野遺跡（江本1984、浦田1985）、石の本遺跡（池田1999）が、また大分県境に近い耳切遺跡第Ⅰ・Ⅱ文化層（村崎1999）、下城遺跡第2文化層（緒方1980）などを挙げることができよう。

曲野遺跡は九州でのAT下位石器群の代表的な存在として古くから知られており、暗褐色土層直下の赤褐色粘質土層上部に主要な包含層が認められ、切出し形のナイフ形石器・台形様石器を主体とする石器群が出土している（第230図A）。不定形の横長剥片や幅広剥片を素材に、折断による調整や平坦剥離、それに急斜度の刃潰し調整が認められる。ただ、切出し形ナイフ形石器については、形態的に台形様石器と明確な一線を引くことが困難である。なお、縦長剥片を素材にした二側縁加工のナイフ形石器は組成されていない。他にスクレイパー、二次加工石器、使用痕剥片、局部磨製石斧、敲石、台石などが出土している。縦長剥片や寸詰まりの縦に長い剥片なども少数存在しているが、ナイフ形石器の素材としての関連性は薄い。石核は打面が一か所ないし二か所固定されたもの、頻繁に打面転移を行ない打面と剥片剥離作業面の関係が一定でないものなどで、剥片は横長や幅広が顕著である。この素材剥片と台形様石器を主体にした製品とが対応した石器生産の構造が確立しているようで、層位および石器群の様相から成立期とされる。

石の本遺跡第8区の主要包含層は赤褐色土層中位（6b層）で、礫群・カーボンなどと共に約3300点の石器群が出土している。上位の5層は黒褐色・褐色・暗褐色をした粘質土層で、最上部にAT火山灰が含まれており、石器群は黒色帯に相当するこれらの層よりさらに下位の土層中に包含されていることになる。

定型的な石器にはスクレイパー、台形様石器、他に少数ながら石錐、尖頭状石器、チョッパー、ピック、たたき石、それに刃部磨製石斧片、二次加工剥片などが存在する（第230図D）。台形様石器はアクシデントおよび意図的な折断による平坦面や剥片の打面を一端に残し、平坦剥離と急斜度の調整が施されるものが目立つ。スクレイパーは大形で一側辺に粗い加工の施されたものが顕著である。両

者の素材には不定形で厚みのある剥片が多用されており、縦長剥片の剥離技術は認められない。鋸歯縁状のスクレイパー、ピック、尖頭状石器などの石器は、基本的に中期旧石器時代後半期の系譜で理解される石器群と考えられている（佐藤2001）。このことから石の本遺跡の石器群は、曲野遺跡に先行するものと考え移行期に位置づける（橘2000）。なお、当遺跡の6 b層（赤褐色土層）から出土した炭化物の放射性炭素年代測定で、 $31,460 \pm 270 \sim 33,720 \pm 430$ という値が得られている。

中九州西部地域で最も東側、大分県境に近い耳切遺跡の基本的な土層は、V層にAT層が認められ、VI層が暗褐色～黒褐色の粘質土層、VII層淡黄褐色粘質土層、VIII層赤褐色粘質土層で、IX層に九重第1軽石層が堆積しており、VI層が黒色帯に相当する。A地点第I石器文化はVII層上面に、C地点第I石器文化ではVI層中位に、D地点第I石器文化ではVI層上位、そしてA地点の第II石器文化はVI a層上位に、各文化層の遺物の出土ピークが考えられている。第I文化層では台形様石器を主体とする石器群が出土しており、第II文化層はナイフ形石器と台形様石器が組成される。

耳切遺跡A地点の第I石器文化と第II石器文化は、後期旧石器時代前半期、AT下位石器群の成立期から発展期の様相を示唆している。すなわち、横長あるいは幅広剥片を素材にした台形様石器を主体にした石器群から縦長剥片剥離技術による縦長剥片と急斜度調整加工のナイフ形石器を中心にする石器群への変遷を層位的に知ることができるのである。

A-I石器文化（第230図B）の台形様石器は素材として不定形な幅広剥片を横位に用い、調整加工は平坦剥離を基本に、急斜度をなすものが一部ある。剥片剥離技術は、打面と作業面を頻繁に転移するものと、厚みのある剥片の周縁をチョッピングツール状に剥離するもので大半が占められている。それに対して、A-II石器文化（第228図F）では、縦長剥片を素材に急斜度調整を施した二側縁加工ナイフ形石器が出土しており、剥片剥離技術には大野川中流域で見られる上下両端からの連続的な剥離による縦長剥片が存在している。台形様石器は素材および調整加工共にA-Iと基本的に同じである。このようにナイフ形石器と縦長剥片、横長・幅広剥片と台形様石器と言う、両者の関連性が認められるのである。A-II石器文化は後期旧石器時代前半の発展期に、A-I石器文化を成立期の所産と位置づけることができる。

2-4 中九州東部地域

中九州東部の大野川流域は火山灰の堆積に恵まれた地域の一つで、AT下位の黒色帯に出土層が認められる遺跡としては、駒方古屋遺跡（橘1985、1987）、百枝遺跡C地区第III文化層（清水・栗田1985）、牟礼越遺跡第2文化層（橘1999a）等が存在しており、縦長剥片剥離技術とその素材を用いた二側縁・一側縁加工のナイフ形石器を主体にした石器群が発達している。なお層位的には黒色帯の中でも特に上部が石器群の主要包含層と見なされる。この3遺跡は層位および石器群の様相から、後期旧石器時代前半の発展期に位置づけられる。

これらに対して、当地域で黒色帯よりさらに下位の地層から出土している石器群の資料は、岩戸遺

跡（芹沢1978、坂田1975）で断片的に知られている。40,000年前の前後が推定されるKjp-1の降下・堆積と時間的な差はほとんどないと考えられている段丘直上の第3文化層（第1次調査）・K文化層（第2次調査）や、それらの上位の石器群である第2文化層（第1次調査）、第2次調査のG～J文化層などで石器群が少数出土している。定型的な石器として、第3文化層にナイフ形石器とされている石器1点と、I文化層で台形様石器1点がある。黒色帯下位出土石器群の剥片剥離技術には横長や幅広剥片、それに縦長剥片とそれを剥離する技術の存在を示唆する資料が知られている。しかしながら、縦長剥片を素材に用いた二側縁・一側縁加工のナイフ形石器は出土してなく、これらの素材を提供する剥片剥離技術は発達していないようである。

同じ大野川中流域に所在する牟礼越遺跡最下層の第1文化層は、黒色帯直下の黄褐色ローム上部に主要な包含層が認められる。石器組成は台形様石器、スクレイパー・石斧・使用痕剥片・礫器、それに敲石・磨石などから構成されており、また、礫群が検出されている。

当遺跡を特徴づける台形様石器は幅広剥片が素材に用いられ、折断加工や平坦剥離、あるいは細かな調整剥離で台形状に整えられている。ナイフ形石器は組成してなく、また台形様石器の加工に明確な急斜度調整は見られない。剥片剥離は厚みのある素材剥片の平坦面を作業面にして縁辺から求心状に行うもの、打面と作業面を入れ替えるもの、打面転移を行なうものなどがあり、長さや幅がほぼ等しい剥片が顕著である。縦長剥片を意識したものが存在するが、黒色帯上部で普遍的な、打面を一端ないし両端に固定して作業面を後退させながら連続的に縦長剥片を剥離する技術は認められない。結晶片岩製の石斧1点は、刃部を欠損しているため、研磨については不明である。

牟礼越遺跡ではAT直下の黒色帯上部（Ⅵ層）の第2文化層で、二側縁加工のナイフ形石器が出土しており、資料数は限られているが、基本的には先に挙げた駒方古屋遺跡、百枝遺跡C地点第Ⅲ文化層と共通するものと判断されよう。

3 後牟田遺跡AT下位石器群と後期旧石器時代前半期の変遷

後牟田遺跡第Ⅱ文化層・第Ⅱb文化層・第Ⅲ文化層は、後期旧石器時代の前半期から移行期にかけての石器群と考えられるものである。各文化層の石器群については本報告書における事実記載で詳細に触れられている。また、第Ⅱ文化層の剥片剥離技術や第Ⅲ文化層の編年の意義についてもすでに論じられているので、ここでは、後牟田遺跡第Ⅱ文化層・第Ⅱb文化層・第Ⅲ文化層について、南九州地域を主体にして、これまで上げた遺跡の出土層位および石器群との対比から、九州における当該期での位置づけを試みる。

石器群の編年の位置づけは、言うまでもなく出土層序と特徴的な石器群の様相が基本とされる。そこで石器群の主体的な出土層序については、①AT火山灰直下の黒色帯上部～中部、②黒色帯下部～褐色土層（粘質土層）上部、③褐色土層上部～中部のように大別されよう。当然のことながら土層の堆積は一遺跡においても地形や地点などで異なることがあり、色調・土質についても必ずしも一様で

ない。黒色帯も黒褐色土層、黒色粘質土層などと呼ばれ、下位の褐色土層（ローム層）、赤褐色～黄褐色粘質土層についても言えることである。その両者の中間に位置する黒色帯下部（下面）～褐色土層上部（上面）は、漸位層として把握されるケースも見られるように、上下の土層との関連で、把握や分層は多分に主観的な面が存在する。黒色帯下位の褐色土層上部・中部や上面・上部についても相対的な要素が強い。これら土層の線引きや文化層の認定には常に困難がつきまとう。

そのようなことから、この大別も将来的にはより客観的に細分されるであろうが、現時点では基本的な基準になり得ると考え、九州地方、特に南部を主体にした地域における後期旧石器時代前半期の遺跡・文化層出土石器群を層序に基づき、移行期・成立期・発展期と言う、歴史的枠組みでその変遷について考察したい。

3-1 発展期（黒色帯上部～中部）

AT火山灰直下の黒色帯上部～中部で石器群の主要な包含層が認められる遺跡に、帖地遺跡第4文化層、前山遺跡、上場遺跡6層上部、狸谷遺跡Ⅰ石器文化、久保遺跡第1文化、クノ原遺跡、耳切遺跡A地点第2文化層、駒方古屋遺跡第2文化層、百枝遺跡C地点第Ⅲ文化層、牟礼越遺跡第2文化層などがある。これらは層位的にAT火山灰（シラス）直下の黒色帯上部と黒色帯中部という区分も必要と考えられるが、ここでは一括して進める。

発展期の主体的な石器はナイフ形石器で、それに台形様石器が伴う場合もある。中九州東部や西部ではナイフ形石器が卓越し、南九州では台形様石器が加わる。これを基本的な在り方としながら、石器組成や素材剥片に多少の違いが見られるが、それを越えた石器群全体での共通性がより色濃く、九州全域ではほぼ等質的な発展が認められる。ナイフ形石器は縦長剥片を素材にした急斜度加工による二側縁ないし一側縁加工のナイフ形石器を始め、AT以降に認められる各種のものが基本的にこの発展期に出揃い、ナイフ形石器の発達に最大の特色が見られる。中九州東部の特に大野川中流域の駒方古屋遺跡、百枝C地点Ⅲ文化、西部の耳切第Ⅱ文化・下城2文化などでは、縦長剥片剥離技術による素材の量産と対応したナイフ形石器生産の構造が確立している。南九州西部地域の狸谷Ⅰ・久保1・クノ原遺跡では、やや幅広で寸詰まりの縦長剥片を主要な素材とした二側縁・一側縁加工のナイフ形石器が製作され、さらに幅広剥片による切出し形のものも見られる。縦長剥片を主体にしながら、形態や素材剥片にある程度のバリエーションが見られる背景には、ナイフ形石器の認定で重視される急斜度調整の加工技術の発達と定着とがあり、当該期における石器生産の特色の一つでもある。

発展期には台形様石器が卓越することは少ないが、幅広剥片を用いて急斜度・平坦あるいは折り取りによる調整が駆使されて製作されている。素材剥片と台形様石器との対応関係はナイフ形石器以上に強く、先行する伝統がこの発展期にも根強く継承されている。後期旧石器時代の開始に構築されている、いわゆる二極構造や二項モードと呼ばれている様相である（佐藤2000、安斎2000a・b）。剥片剥離技術には、打面を一端ないし両端に設け、打面を後退しながら連続的剥離技術による縦長剥片、

寸詰まりの縦長剥片、それに幅広剥片などが存在する。素材剥片の主体的な在り方に多少の地域性を窺わせながらも、九州全体で剥片剥離技術に共通性が認められる。

この全般的な状況の中で、球磨・人吉地域に所在するクノ原遺跡では、縦長・やや幅広の縦長剥片を素材にした二側縁・一側縁加工のナイフ形石器に、大型の搔器・削器が伴い、さらに鋸歯縁石器、錐状石器と判断される石器が組成しているのである。古相とも思われる様な石器群の存在は、黒色帯下部から褐色土層上部の成立期の石器群と類似しており、発展期の中で時間的に先行するのか、地域的な特色なのか、あるいはその両者であるのか、のいずれかの可能性が考えられよう。

後牟田遺跡第Ⅱ文化層の石器群は主として7層の黒色～黒褐色土層の上部・中部から出土しているので、層位的にはまさに黒色帯上部～中部そのものであり、発展期に位置づけられる。石器群の内容は地点によって多少異なる面も見られるが、剥片石器はナイフ形石器・台形様石器・基部加工石器・削器などで代表させることができよう。ナイフ形石器は部分加工・一側縁加工が出土しており、その加工は先端・基部と局部的で、しかも刃潰し加工には精粗が見られ、調整技術は概して未発達な印象を受けるものが多い。台形様石器の数は限られているが、素材剥片・製品共に規格性が乏しい。これは不定形な素材と調整が部分的であることに起因するものと考えられる。素材剥片には縦長、寸詰まりの縦長剥片、幅広剥片などが用いられているが、器種と素材剥片との結びつきは全体的に明瞭さが欠けているようである。

第Ⅱ文化層のナイフ形石器・台形様石器の両者は、他地域での同じ発展期のそれに比較すると形態・調整技術共に古拙な様相を呈している。同様な傾向を有する石器に基部加工石器があり、当遺跡の石器群の中であって搔器・削器と共に数的にも多く、下位のⅡb文化層・Ⅲ文化層でも出土しているので、先行する文化層との関連が示唆される。素材剥片にバリエーションが見られ、加工も基部だけの粗い調整と相俟って器種としての均一性が乏しく、やはり古相を呈する。基部加工石器はこれまで発展期の石器組成で上がってくることがなかっただけに、今後、他遺跡との比較検討が急務であろう。

3-2 成立期（黒色帯下部～褐色土層上部）

黒色帯下部～褐色土層上部に文化層が求められる成立期の遺跡には、血気ヶ峯遺跡第2文化層、曲野遺跡、耳切遺跡A地点第1文化層、矢野原遺跡第Ⅰ文化層、・牟礼越遺跡第1文化層などが存在する。潮山遺跡については包含層が礫層にまたがっており、また、上場遺跡6層下部も包含層が地山に続くと考えられる安山岩風化土層中で、両遺跡共層位的には明確さを欠いているが、発展期に先行することは確かである。移行期の可能性も捨て切れないが、当該期に含めておく。現時点で地層と文化層の関係を正確に知ることができないが、高野原遺跡も上げることができよう。さらに直接的な地層の対比はできないであろうが、立切遺跡では種ⅣとAT火山灰との中間に明黒褐色（X層）と硬質の黒褐色土層（XI）が堆積しており、これが黒色帯に相当すると判断されるので、種Ⅳ直下の文化層

は黒色帯下部～褐色土層上部あるいは褐色土層上部に認められることになり、層位的にも成立期とすることができ、種Ⅳの年代とも矛盾しない。横峯C遺跡は黒色帯相当層が認められないが、種Ⅳの存在から直下のⅠ文化層と直上のⅡ文化層も共に当該期と考える。

成立期の定型的な石器としては台形様石器が卓越しているが、剥片の片側ないし両側に急斜度調整を施した切出し形のナイフ形石器は、主として南九州地域や中九州西部地域で組成される場合が見られる。二次加工で急斜度調整の存在は知れるが、縦長剥片素材の二側縁・一側縁加工のナイフ形石器は未発達である。曲野・血気ヶ峯2・矢野原1・牟礼越1では刃部磨製石斧あるいは打製石斧が出土しており、当該期の組成に加わる。台形様石器・切出し形ナイフ形石器の素材には、横長や幅広剥片が多用され、調整加工は急斜度調整、平坦剥離、それに折断の手法などが用いられる。当該期の石器群の特徴は台形様石器とその素材を提供している横長剥片や幅広剥片の発達に求められる。すなわち、打面を頻繁に転移、あるいは打面と作業面を交互に入れ替える、さらに素材の平坦な面を作業面にし、打面が周辺を巡るなどの剥離技術によって生産された剥片と台形様石器や切出し形ナイフ形石器との対応が確立しており、成立期の石器構造の一面として把握される。一方、縦長剥片の指向性が強く、その萌芽的ともいえる縦長剥片の剥離技術も認められるが、二側縁・一側縁加工のナイフ形石器との積極的な対応関係は明確でない。

先にも触れた球磨・人吉地域に所在する潮山遺跡は、層位的な問題を抱えているが、組成中にナイフ形石器は認められず、鋸歯縁石器、錐状石器、小型の部分加工石器などが出土しており、全体的により古相を示唆する。その一方では、打面を移動しさらに打点を左右に変えながら寸詰まりの縦長剥片を連続的に剥離する技術は、発展期に二側縁・一側縁加工のナイフ形石器素材として発達・定着する縦長剥片剥離技術の直前段階が窺える具体的なものとされよう。台形様石器については組成する可能性が極めて高いと考える。

宮崎県矢野原遺跡も鋸歯縁石器・小型剥片の基部や側縁部に加工を施した石器それにナイフ形石器・台形様石器と判断できそうな石器群が出土しており、全体的に潮山遺跡と共通する様相が目立つ。この両遺跡は同じ成立期の遺跡、特に中九州地域に比べて異相な面が見られる。石器群の出土層位は基本的に黒色帯下部から褐色土層の上面に対比されるので成立期と考えることができ、多分に地域的な様相と見なすことができよう。

後牟田遺跡第Ⅱb文化層は調査地点による石器組成の違いがあり、また地点によっては第Ⅲ文化層出土石器群との類似性が指摘できるなど複雑な様相が窺える。地層的には7層下部から漸位層である7b層中部もしくはその相当層に主要な包含層が認められるので、この際問題となるのが漸移層の7b層の理解・解釈である。7b層は7層の黒色～黒褐色の下部から無段階で8層の褐色ローム層上面まで続いており、当然のことであるが上半部は黒みが強く、逆に下半部は黄褐色土により近い色調・土質になる。そこで分層の視点を変えれば、この漸位層の上部は7層黒色～黒褐色の下部に、一方の下部は褐色ローム層上部としての分層も可能と考えられ、これに従うと第Ⅱb文化層の主要包含層は、

黒色帯下部から褐色土層上部とされる。

第Ⅱb文化層出土の剥片石器群は、地点による違いが認められ、一括して扱うことに問題を残しており、第Ⅱ・第Ⅲ文化層に比較して石器群の数が、特に剥片石器が少ないことも問題とされよう。このことに関連して、第2地点道路部分の調査区および第3地点北区共に、本来の石器組成がほぼ揃っていると見なされるかどうかである。前者では基部加工石器と鋸歯縁石器が、後者では削器が目立った存在である。このことは特色とされるが、これらの石器は概して大型～中型で、小型の石器群を欠いている可能性も考えられ、当文化層の把握を一層困難にしていると言えよう。もちろん基部加工石器と鋸歯縁石器は第Ⅲ文化層で特徴的な石器群だけにそれに包括される可能性も否定できない。それでいて、第3地点北区における石器群の出土状況や接合資料から、Ⅱ・Ⅲ文化層とは区別される文化層の存在が考えられるのである。地点による組成の差異は、主要な生活内容の相違としての理解も可能と思われ、また、大型の搔器・削器、基部加工石器などが主体を占め、台形様石器を含む小型の剥片石器が加わる組成の石器群を想定する余地も残されている。

7層下部から7b層中部にかけて、もしくはその相当層から出土している第Ⅱb文化層の石器群は全体的に古相の印象を受け、中九州西部・東部の成立期の様相とは著しく異なり、むしろ南九州西部・東部の矢野原1文化、潮山、それに血気ヶ峯第2石器文化の石器群の一部との類似性が求められる。これらの遺跡の出土層位は先に上げたように黒色帯下部から褐色土層上部である。

そこで後牟田遺跡の第Ⅱb文化層については、その可能性として九州の後期旧石器時代前半の成立期に位置づけ、より先行する石器群の強い伝統を継承しながら、それでいて南九州地域の当該期石器群との共通性も具備している石器群と理解しておきたい。

3-3 移行期（褐色土層上部～中部）

後牟田遺跡第Ⅲ文化層出土石器群は、移行期としての編年的位置づけはすでに行われており、極めて妥当と考えるのでそれに従いたい。

九州において移行期と判断できそうな他の遺跡を探すと、石の本遺跡8区と血気ヶ峯第1文化にその可能性が考えられる。それに資料が限られているが岩戸遺跡1次の第3文化層・2次のK文化層を、また、岩戸G～J文化も候補として挙げることができよう。

そこで、移行期としての可能性のある石の本遺跡と血気ヶ峯第1文化層について、石器群および出土層位から後牟田第Ⅲ文化層と対比してみる。

台形様石器や刃部磨製石斧の存在、それに調整加工での急斜度加工の有無などは、両者の異相とされる。特に台形様石器は後期旧石器時代成立のメルクマールとする見解は傾聴すべきであり、石の本遺跡では台形様石器が出土しているので、後期旧石器時代の初期としての位置づけも可能となる。しかし同時に指摘されている通り、単発的に台形様石器のみを問題視するのではなく、素材との関連や他の要素を含めたトータルとしての考え方を重視したい（安斎2000a）。

大型～中型の各種の搔器・削器、鋸歯縁状の石器、錐状石器などは、これまで述べたように九州地方の、特に石の本遺跡が所在する中九州西部、さらに東部地域の成立期の石器群には基本的に組成されてないのである。むしろ中期旧石器時代との移行期やさらに中期旧石器時代後半期の類似性が問われ、また、後牟田第Ⅲ文化層との関連性が指摘できよう（佐藤1999）。

血気ヶ峯第1文化は公開されている資料が限定されており、第Ⅲ文化層とも石の本遺跡とも十分な比較検討できないが、台形様石器やピックと考えられる石器の存在は、石の本遺跡の石器群に共通する要素とされる。

石の本遺跡および血気ヶ峯第1文化では、成立期に認められる縦長剥片への指向性が窺えず、それに横長あるいは幅広剥片と台形様石器の明確な対応関係が確立しているかどうか疑問に思える。さらに石器群出土層位は、いずれも黒色帯下位の褐色土層上部～中部にかけてと判断されるのである。以上のことから、両遺跡は成立期よりもむしろ移行期として可能性が高いと考えて、それでいて、時間的には台形様石器を有しない後牟田第Ⅲ文化層が、石の本遺跡に先行するものと予想される。

後牟田第Ⅲ文化層の主要な包含層は、漸移層の7b層下部から8層の褐色ローム層上部に認められることは、本報告書で何度も触れられている通りであるが、漸移層について先に述べた解釈を採用すれば、7b層下部は褐色土層の上部に、褐色ローム層上部は中部に相当するものと考えることができよう。すなわち、第Ⅲ文化層は基本層序の褐色土層上部から中部にかけて石器群が出土していることになり、層位的に移行期の基本的な層序と一致し、石の本・血気ヶ峯とも層位的に符合することになる。ただ、これらの遺跡が南九州の東部・西部、さらに中九州西部と距離的に離れており、出土層序で援用した黒色帯の堆積のメカニズムや層位的な把握など、具体的な問題を抱えていることも否定できない。さらに石器群の地域性や原石の獲得・利用の在り方も石器群の構造全体に深く関わることを考えられるだけに、その対比は慎重を期すべきである。実際、中九州東部の岩戸遺跡の一部は層位的に当該期の可能性があるが、石器群の様相は先の3遺跡とは剥片剥離技術などで異なる様相が示唆されている。特にこの移行期については、考古学的にも形質人類学的にも多方面にわたる複雑な様相が予想されるだけになおさらである。また、移行期については、当然のことであるが中期旧石器時代後半期と、一方では成立期と連動して究明される必要がある。

おわりに

以上、後牟田遺跡で確認されたAT下位の各文化層について、出土層位と剥片石器群の様相から第Ⅱ文化層を発展期に、実態に明瞭さを欠くが第Ⅱb文化層を成立期としての可能性を考え、さらに第Ⅲ文化層を移行期として、後期旧石器時代前半期の変遷で3つの文化層の位置づけを行った。

各文化層についての個人的な年代観は、長友らによるルミネッセンス法によって35,000年前頃と考えられている第9層霧島イワオコシ（Kr-Iw）を考慮すると、その上位の8層上部に主要な包含層がある第Ⅲ文化層の年代は、約34,000年前を考えておきたい。この年代観は石の本遺跡の年代に限りな

く近いことになり、両者で出土している一連の大型～中型の石器群が類似していることも理解されよう。これに関連して第Ⅱb文化層を30,000年前の前後と予想し、第Ⅱ文化層はAT火山灰との年代に左右されるであろうが、28,000年前の前後の時期とされよう。

後期旧石器時代前半の石器群について、移行期から発展期までを剥片石器群に焦点をあて、検討対象にしたが、礫塊石器の重要性は言うまでもなく、当考察編でも十分に論じられている通りである。後牟田遺跡の各文化層で常に量的にも勝っており、成立期の横峯C遺跡・立切遺跡の調査でもその傾向が顕著に表れている。植物質食糧重視の生活体系は、後期旧石器時代前半期を通じて、特に南九州地域で発達していることが、後牟田遺跡で確かめられたと言えよう。

南九州の地域性と考えられるであろう礫塊石器の在り方と符合するかのように、後期旧石器時代前半期、南九州地域の剥片石器の中には、粗雑な印象を受けるものが目立つのである。大型～中型の素材剥片を用いた一見粗い作りの搔器・削器類、それに横長あるいは幅広の小型剥片に部分的な調整を加えた石器など、成立期・発展期のそれぞれで、より古い様相を呈する一群石器の存在である。発展期・成立期に認められ九州のほぼ全域で共通する等質的な様相と共に、一面で南九州地域において主として見られるこれらの石器群は、中九州、特に東部地域の当該期のそれとは大きく異なっている。この要因に石材環境の違いやその対応さらに素材剥片の剥離技術など石器生産構造との関連も当然考えられるが、その一方で、それをも包括するAT下位の南九州地域を主とした生活基盤の在り方が、礫塊石器や一部の剥片石器群に現象面として具体的に表れている可能性を提起しておきたい。後牟田遺跡のAT火山灰下位の各文化層は、まさに後期旧石器時代前半期からさらに移行期にかけての重要な問題を投げかけている遺跡でもある。

註

地域区分については基本的には〔木崎1987〕の案に従うが、中九州の西部については熊本県南部の八代市・五木村をほぼ目安にして、それ以南は南九州地域に含めたい。その結果、球磨・人吉地方は中九州西部から外れ、南九州西部に含まれることになる。これは石器群の様相を加味してのことである。

北九州西部・東部にもAT火山灰下位の石器群が存在しており、編年的な位置づけも行われている（木崎1989, 佐藤1992, 萩原1997）。これらの地域はここで主体的に取り扱うAT火山灰・黒色帯・褐色土層などと明確な対比が困難と考え、それに本報告書の後牟田遺跡との関連から九州南部に焦点をあてるため敢えて触れていない。なお、九州西部を中心にした地域の中期旧石器時代から後期旧石器時代前半期の移行期について最近の成果が〔川道2000〕によってまとめられている。

引用参考文献

- 安斎正人 2000 a 「台形様・ナイフ形石器群（2）」『先史考古学論集』第9集 1-28p.
 安斎正人 2000 b 「台形石器と台形様石器－台形様・ナイフ形石器群（3）－」『九州旧石器』第4号 53-70p.

- 池田朋生編 1999 「石の本遺跡群Ⅱ」熊本県文化財調査報告 第178集 熊本県教育委員会
- 池水寛治 1967 「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第3巻第4号 1-21p.
- 江本 直編 1984 「曲野遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告 第65集 熊本県教育委員会
- 浦田信智編 1985 「曲野遺跡Ⅲ」熊本県文化財調査報告 第75集 熊本県教育委員会
- 緒方 勉・古森政治編 1980 「下城遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告 第90集 熊本県教育委員会
- 川道 寛 2000 「長崎県におけるAT下位石器群」『第26回九州旧石器文化研究会資料集』17-22p.
- 木崎康弘編 1987 「狸谷遺跡」熊本県文化財調査報告 第50集 熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1989 「始良Tn火山灰下位の九州ナイフ形石器文化」『九州旧石器』創刊号 5-22p.
- 木崎康弘編 1993 「久保遺跡」熊本県文化財調査報告 第125集 熊本県教育委員会
- 桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』第31号、4-27p.
- 九州旧石器文化研究会 2000 「九州における後期旧石器時代文化の成立」『第26回九州旧石器文化研究会資料集』
- 坂田邦洋編 1975 『大分県岩戸遺跡』広雅堂
- 坂口浩一・堂込秀人編 2000 「横峯C遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書8 南種子町教育委員会
- 佐藤宏之 1992 「後期旧石器時代への移行」『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房 74-89p.
- 佐藤宏之 1999 「西南日本における中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行」『早水台から上高森まで』東北福祉大学 73-78p.
- 佐藤宏之 2000 「日本列島後期旧石器文化のフレームと九州島と北海道」『九州旧石器』第4号 71-82p.
- 佐藤宏之 2001 「日本列島の前期・中期旧石器時代を考えるー藤村氏非関与資料からの見通し」『第15回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 127-142p.
- 清水宗昭・栗田勝弘編 1985 「百枝遺跡C地区」大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書 三重町教育委員会
- 芹沢長介 1978 「岩戸」『東北大学文学部考古学研究室考古学資料集』第2冊 東北大学文学部考古学研究室
- 橘 昌信編 1985 「駒方古屋遺跡発掘調査報告書」別府大学附属博物館
- 橘 昌信編 1987 「駒方古屋遺跡第2次・第3次発掘調査報告書」別府大学附属博物館
- 橘 昌信編 1999 a 「牟礼越遺跡」三重町文化財調査報告書第5集 三重町教育委員会
- 橘 昌信 1999 b 「南九州の旧石器文化鹿児島県におけるAT下位石器群の最近の調査」『鹿児島考古』第33号 59-73p.
- 橘 昌信 1999 c 「九州島における後期旧石器時代成立期の石器群」『第4回国際学術会議ースヤング遺跡とその近郊ー予稿集』丹陽郷土文化研究会・韓国古代学会 51-64p.
- 橘 昌信 2000 「九州における中期旧石器時代と後期旧石器時代成立期前後の石器群」『別府大学博物館研究報告』No.20. 1-23p.
- 谷口武範・山田洋一郎ほか編 1995 「打扇遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・蔵田遺跡」宮崎県教育委員会
- 堂込秀人 1998 「種子島の旧石器文化」『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料集』17-26p.
- 堂込秀人 2000 「鹿児島県における種子島の後期旧石器時代文化の成立」『第26回九州旧石器文化研究会資料集』23-28p.

- 永野達郎編 2000 「帖地遺跡（旧石器編）」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告 鹿児島県喜町教育委員会
- 萩原博文 1997 「AT降灰前後の石器群」『九州旧石器』第3号 11-22p.
- 古森政治 2000 「潮山遺跡・クノ原遺跡」『第26回九州旧石器文化研究会資料集』
- 廣田晶子 2000 「宮崎県高岡町高野原遺跡のAT下位出土石器」『人類史研究会第12回大会発表予稿集』人類史研究会 71-72p.
- 村崎孝宏編 1999 「耳切遺跡」熊本県文化財調査報告 第180集 熊本県教育委員会
- 和田好史 2001 「人吉市・球磨地方のAT火山灰下位の石器群について－人吉市鬼木町血気ヶ峯遺跡の石器文化を中心として」『ひとよし歴史研究』4号 1-21p.

挿図は上記の報告書・論文などから引用しているが、AT下位石器群の出土遺跡分布図を含めその大半は第26回九州旧石器文化研究会「九州における後期旧石器時代文化の成立」の資料集から引用した。また、現在整理中のものについては、無論挿図として掲載していないが、文章中では参考資料として用いている。県ごとに関連資料を作成した各県の担当者ならびに熊本県旧石器文化研究会の方々に心から謝意を表したい。